

「若手研究者支援 1 次募集」国際学会発表	
“I Suppose I’m Made So”: Gendered Modernity’s Patriarchal Constraints and Griselda’s Impatient Agency	
氏名 楊 雨晨	所属 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻 博士後期課程
期間	2026 年 06 月 25 日 ～ 2026 年 06 月 26 日
学会・分科会名	The Sixth International Children’s Literature Symposium
場所	アントワープ大学（ベルギー）
発表者名、 発表形式	Yuchen Yang、口頭発表

1. 本学会発表の意義・目的

本発表の目的は、児童文学における「子ども」の理想化が、単に無垢な存在の称揚ではなく、社会的・道徳的責任を子どもに担わせる仕組みでもあることを明らかにすることであった。Rita Felski が近代性をジェンダー化された概念として捉え直した議論を踏まえつつ（Felski, 1995）、Griselda の道徳的形成を、少女に特有の自己統治と感情管理の問題として検討した。また、Sarah Stickney Ellis の *conduct writing* に見られるように、ヴィクトリア朝において女性の気質や感情の統制は、家庭内の道徳秩序と密接に結びつけられていた（Ellis, 1839）。本研究は、ヴィクトリア朝児童文学における *child figure* を、近代的な主体形成とジェンダー化された道徳教育の観点から再考する試みである。また、本渡航は、国際的な場で自らの研究を発信し、海外の研究者と議論を行う経験を通して、国際的に活躍する女性研究者としての能力を高める機会でもあった。

2. 発表で得られた成果

本学会では、各国の研究者による発表を通じて、児童文学と近代性、国民形成、移民、教育、ジェンダー、メディアなどを結びつける多様な研究動向に触れることができた。その中で、自分の研究が、現代的・実践的な問題を直接扱う研究とはやや異なり、歴史的な児童幻想文学の精読を通して、子ども像や道徳的主体の形成過程を明らかにするものであることを再確認した。発表後の質疑応答や他の参加者との交流を通じて、Griselda の抵抗を単純な反抗としてではなく、従順な「よい少女」像の内部に生じる不安定さとして捉える視点が有効であると感じた。また、Rita Felski の *The Gender of Modernity* を参照しながら、近代性や市民性をジェンダー中立的なものとしてではなく、少女の自己統制や感情規範と結びつけて論じる必要性を改めて認識した。今回の発表は、博士論文の一章として進めている Molesworth 研究の位置づけを明確にする上で、大きな成果となった。

3. 今後の展望

今後は、本発表で得られた視点を踏まえ、博士論文における *The Cuckoo Clock* の章をさらに発展させたい。特に、Griselda の成長を単なる道徳的改善としてではなく、家庭内でのしつけ、幻想的経験、

ジェンダー化された自己統制が交差する過程として整理していく予定である。また、今回の国際学会で得た研究交流を生かし、児童文学研究における近代性、ジェンダー、子どもの主体性をめぐる議論に、歴史的・文学的な観点から貢献できるよう研究を進めていきたい。

参考文献

Ellis, S. S. (1839) *The Women of England : Their Social Duties, and Domestic Habits*, London : Fisher, Son, & Co.
Felski, R. (1995) *The Gender of Modernity*, Cambridge, MA : Harvard University Press.
Molesworth, M. L. (1877) *The Cuckoo Clock*, London : Macmillan and Co.

よう うしん／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

- ・英文タイトル “I Suppose I’m Made So”: Gendered Modernity’s Patriarchal Constraints and Griselda’s Impatient Agency
- ・英文氏名（採択者の名前） Yuchen Yang